The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文の意味に関する基礎的研究
Author(s)	河上, 誓作
Citation	大阪大学, 1979, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/113
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏名・(本籍)	河上誓作
学位の種類	文学博士
学位記番号	第 4778 号
学位授与の日付	昭和54年12月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**文の意味に関する基礎的研究**
論文審査委員	(主査) 教授 毛利 可信
	(副査) 教授 山川 鴻三 助教授 成田 義光

論文内容の要旨

この論文は，言語形式と，それによって表現される言語的意味との関係を，意味論と語用論との両面から分析し，原理的に解明しようとする試みであって，第一部（第一章——第五章）第二部（第六章——第九章）の二部から成る。第一部は主として意味論的考察で，動作目的語，運動の動詞，修飾語句等を含む，一連の英語の語法について，その論理的構造を明らかにし，それによって，それらを含む文の的知意味のあり方を規定する。第二部は主として語用論的考察で，文を発話行為としてとらえ，それぞれの文脈における話者の視点，発語の力(illocutionary force)，否認，約束，勧誘等の発語内行為を論じ，さらにいわゆる'NEG－Raising'の現象の再検討にも及ぶ。以下，各章ごとにその内容の概観を試みる。

第一章　動詞と動作目的語の関係，および，第二章，枠構造動詞とその修飾語の関係：　ここでは，まず，基本例として

(1)　John sighed (deeply).

(2)　John gave a (deep) sigh.

の2文を対比し，(1)をA型文，(2)をB型文とする。A型文で単一の動詞であらわすものを，B型文では「動詞＋動作目的語」という枠構造動詞であらわしているが，この動作目的語と，一般の目的語との機能上の差異が問題である。著者は，A型文とB型文との間に存在する統語的，形態的に規則的な対応関係について論じ，しかも，この両型が意味的に同一とはいえないという点にも注意を喚起している。たとえば，'I snoozed.'と'I took a snooze.'との間には相(aspect)的な差異が存在する。

すべて動詞は根底に「……する」という意味要素を持つが，これを抽象的述語'do'であらわすと，

自動詞の心理構造は

rise → | do ＋rising |

となり，また，他動詞の心理構造は本来他動詞として持つ目的語をxとすると

put → | do ＋putting(x) | ＋specified x
Direet object

となる。このようにしてみると，枠構造動詞の動詞部分は‘do’の代替語であり，その動作目的語部分は‘do’の目的語である動名詞の代替語である。従って，これらは目的語といっても| |の内部に生起するものであり，これを内部目的語という。これに反し，本来の他動詞の目的語は，心理構造においてその| |の外部に生起するものであり，これを外部目的語という。‘He geve a sigh.’の‘a sigh’も，‘He geve me a book.’の‘a book’も，文法的には，ともに目的語であるが，その機能は明らかに異なっている。この点からさらに論述を進めて，枠構造動詞の動詞部分が潤色を伴う場合，動作目的語部分に修飾語をつける場合などを考察し，また，当然の帰結として同族目的語にも言及し，英語においてこの種の名詞中心構文が多用される契機および，枠構造動詞の持つ利点を例証する。

第三章　運動の動詞とPathの表現：　運動の記述にあたって，Fillmoreの初期の説のように，Locative, Source, Goal の格を認めるだけでは不十分であって，Path（経路）という観点が必要である。いま Sourceを‘So’, Goalを‘G’, Pathを‘P’であらわすと，

a. Sam toured from Japan(So) to Taiwan(G) by way of Seoul(P_1) and Shanghai(P_2).
b. Sam toured East Asia(P_s).
c. Sam toured East Asia(P_s) from Japan(So) to Taiwan(G) by way of Seoul(P_1) and Shanghai(P_2).

の3文の対比から明らかなように，P_sとP_n(P_1, P_2, …）とは異質なものである。そこで，著者は，このP_sとP_nとの包含関係，順序関係などを詳細に調べ，Pathの理論の有効性を論じている。なお，‘sink’（沈む）のように，〔＋path〕でありながら，P_sもP_nも伴わない動詞もあるが，その種の動詞は，本来，その語義の中にPathの概念を含むものであるとしている。

第四章　「形容詞＋名詞」構造における内包的特殊化の機能：　ここでは最初に修飾語と主要語との関係についての一般的概観があり，その上で，本章における形容詞とは，内包的特殊化の機能を持つものに限定するとことわっている。すなわち，「もの」Zに対して，「どんなZ」というように，その性質を記述するときの，認識のメカニズムを明らかにすることが，本章の主眼である。

a red-haired girl ;　a mustard-coloured cardigan

これらはいずれも

X－Y－ed ＋Z

という表層構造を持つが，その基底構造は

Z〔Z HAVE Y〔Y BE X〕〕
S　　S′　　S′S

であると考えられる。そこで，上記のような表層構造の語句において，X，Yの両方が必要とされる場合，その一方を欠く場合等について考察する。人間は当然毛髪を持つから，‘a haired girl’は不適切である。同様にZが尾を持つ動物とわかっている場合には‘a tailed Z’は不適切であり‘a long-tailed Z’のようにXが要求される。しかし，尾を持たない動物もあるから，場合によっては‘a tailed Z’の形もあり得る。また，‘a yellow-coloured book’は冗長で，一般には‘a yellow book’といい，ここではYを欠くが，それは‘yellow’はその語義の中にすでに‘colour’という部分を含むからである。このようにして，Zの存在が，その物理的，属性的構成要素としてYの存在を必然的に含意するか，しないか，という観点から，著者は上記の基底構造における「はめこみ部分」のSに関する意味的制約について論じている。

第五章　‘Non-restrictive adjunct’における非制限性について：　ここでは上記第四章の修飾語句の考察から当然派生する，修飾語の制限性・非制限性の問題点を論ずる。非制限的付加詞とは主要語の現に有する属性を特示し，付加的，強意的，感情的色彩の強い付加詞をいうのであるが，‘white snow’における‘white’と‘snow’の内容の重複性が論理的客観的であるのに対し，‘The fair Ophelia !’における‘fair’と‘Ophelia’の関係は，表現者の感情の世界を背後に持つものである。そこで意味論的な認識的意味と，語用論的な表現的意味とを区別し，また，それぞれの側面において，その意味内容において必然的性質と可能的性質とを区別することが必要である。この観点に立つとき，非制限性とは，主要語と，その語の指示対象の必然的性質をあらわす形容詞との間に成立する分析的関係であると考えることができる。

第六章　“Locative ＋ Verb ＋ Subject”型文の考察：　ここでは

(1) I opened the bedroom door, and <u>out walked the cat</u>.

(2) <u>On the table lay a dagger</u>.

のような文について，これらが持つ意味論的，語用論的特徴を明らかにすることを試みている。この(1)を

(3) I opened the bedroom door, and <u>the cat walked out</u>.

とくらべてみると，(1)では，話者は寝室のドアーの外にいる，という推測が成り立つのに対し，(3)ではそれが成り立たないといえる。この理由は，(1)では，‘the cat’が文末にあるために情報価値が高く，そこに意外さや驚きの感情がこめられている点に求められる。(2)でも同様で，文頭の名詞は既知のものであるが，それに関して，しかるべき位置にまず聴者を注目させ，その上で「そこにあるものは何々であった」というようように対象物を導入するのである。それで，(1)も(2)も，話者あるいは聴者の世界に，何かが，‘coming into view’という意味を伴って，導入されることをあらわすことになるのである。ただし，

(4) <u>Away went the dog</u>, and soon it came back again, bringing a box of money in its mouth.

については，これがあてはまらないように見えるが，しかし，これも「新たな事態が眼前に生じた」という意味では‘coming into view’という解釈が可能であると著者はいう。

第七章　'You' を主語とする間接発話文の考察：　いわゆる'You' utterances の発話の力について Searle の説を紹介し，それを修正する形で具体的な考察を進める。たとえば

(1)　Can you pass the salt?

(2)　You can go now.

をくらべてみれば，(1)は要請の力を持つが，許可の力を持つとはいえないであろう。(2)は，場合に応じて，この両者を持ち得る。この(1)，(2)の差異はどこからくるのか，というような問題がある。著者の議論の骨子は，種々の発語内行為の成立条件，ならびに話者と聴者との関係――たとえば，聴者の能力について話者がどのような情報を持つか，話者が聴者を支配する意図があるか，ないか，などの関係――を勘案することによって，どのような言語形式がどのような発語内行為と結びつくかを論ずることができるし，また，ていねいさの度合をも測定できるという所にある。

第八章　否定表現における婉曲と強調

(a)　I am not unhappy.

(b)　I am never unhappy.

この２文のうち(a)は婉曲，(b)は強調であるが，この差異はどこから出てくるのか。著者は，この問題を解明するために，「反対と矛盾」「AEI Oの４命題の相互関係」および，これらに対応する言語表現――とくに否定詞の作用域と量化の問題――の３者間の関係を総合的に考察している。

第九章　いわゆる'NEG–Raising' の現象について：

(1)　John thinks Sally hasn't left.

(2)　John doesn't think Sally has left.

変形文法では，(2)が(1)と同義と解される場合，それを(1)の否定詞の繰上げとして説明するが，著者はこの扱いにあきたらず，これとは別の観点から説明する。そのための考え方には二つの柱がある。一つは'I think' という形式に expressive と reportive との二種類を区別し，前者を主観性の標識とみることであり，いま一つは，'P' なる形の文が発話された場合の構造を，Lyons にならって

(I say so)	(it is so)	(that p)))
performative component	modal component	propositional component
(the neustic)	(the tropic) the	(the phrastic)

のように表示することである。簡略にすれば

(I say 〈it is [p] 〉).

ともなる。そこで，否定詞 not がこの三つの要素のどこに作用するか，および，'I think' が neustic 部分の顕在化であるか，それとも命題 p の内部に入るのか，などの問題を総合して考えることにより，(1)，(2)が同義とみえる場合にも語用論的な差異があることを指摘し得る。さらに'I think' の形が，主語の人称や動詞の時制の転移を受けた場合，あるいは'think' を'believe' 'suppose' などに変えた場合の多様な形式の微細な意味分化をも合理的に説明し得るのである。

論文の審査結果の要旨

本論文で考察の対象となっている文法事項については，従来の伝統文法や変形文法等では，ややもすれば，表層構造に密着した，言語形式偏重の議論がなされ，一般に，その取扱いが不十分であった。たとえ，論理構造まで還元する試みがなされた場合でも，それは，もっぱら孤立的な文の展示的生起を対象としており，文脈や対人関係をも考慮した，語用論的生起の面は著しく閑却されてきている。本論文は，このような不備を是正し，自然言語を生きた形で把握するために，自然言語に内在する論理と，言語使用者の心理との結びつきを科学的に解明しようとしたものである。著者は，言語哲学，論理学，心理学，ならびに日常言語学派の諸学説を渉猟し，これらを有機的に統合した上に，独自の洞察力をもって，新知見を加え，それを簡潔，明快に論述しており，その所説は示唆的であり，また説得力に富む。とくに第八章と第九章で「否定」を論じた所は，その最も成功した例であるといい得よう。ここに用いられた，「発話の三層構造」，'I think'の2種の用法，「否定文の主張」と「否認」との区別などの諸点は，ここ数年来，何人かの学者によって考察されてはきたが，まだ十分の展開を示してはいなかったものである。著者の功績は，これらの新言語学関係の新説と，従来の古典論理学の諸概念などとの間の融合をはかり，その全体を大局的に見通した線に立って，現在の重要な論点——たとえば，否定詞繰り上げ理論の有効性の問題——について，新らしい接近法を示した点にあるということができる。

しかし，本論文にも疑問や不満が全くないわけではない。第一に，論文全体の構成の問題がある。上述の通り，各章それぞれの内容は精緻を極めた好論ではあるが，第一部と第二部との関係，各章の主題相互の関係および論文全体の体系化については，やや論述が足りないような印象を受ける。この点は，語用論そのものが新しい学問であり，流動的であるから，やむを得ないとも考えられるが，それにしても，各章の文法事項について，著者のいう「基礎的研究」の中での，それぞれの座標をもっと明確にしておくべきであろう。

次に，'X—Y—ed Z'に関連して基底文からの変形を示しているが，このままでは，著者は「すべての形容詞修飾語は関係節縮小によって得られたものである」と考えているとの誤解を招きやすい。ここには何らかのただし書きが必要と思われる。

さらに，第一章，第二章で'do'の代替語をいろいろ示しているが，'give'，'have'などについては，それが純粋に'do'の代替語である場合，それぞれの原義を保存している場合，およびその中間段階等について細かく例示することが望ましい。それによって，はじめて'give the door a kick'というときの二つの目的語の機能上の区別も規定できるし，'He gave me a surprise.'と'I had a surprise from him.'の相補関係，ならびに，'I had a shock.'と'I had a look.'における二つの'have'の差異なども説明できるはずである。

最後に，前述の第六章の(4)の'Away went the dog, …'の部分は，著者の説明にも拘らず，これは，ほかの'Locative + Verb + Subject'の文と比べた場合，theme, rheme の関係が反対になると考え

られるからである。

以上のように，いくつかの点で批判の余地はあるが，これらは論文作製の技術上の問題，あるいは，末梢的な，そして見解の相違に帰せられる可能性のある問題であるから，本論文の大筋にいささかも影響を与えるものではない。よって本論文を学位請求論文として十分の価値を有するものと認定する次第である。